

子どもへの絵本の読み聞かせに対する親の考え - 0歳児, 5歳児, 小学2年生の比較を通して -

藪中 征代*¹ 吉田 佐治子*²

Parents' Thoughts on Reading Picture Books to Children A Study of Parent Responses on Reading to Children at Ages 0, 5, and 2nd graders

YABUNAKA, Masayo and YOSHIDA, Sachiko

要旨

本研究では、絵本の読み手である親に焦点を当て、親は絵本の読み聞かせにどのような考えをもっているのか、また、親の考えは、子どもの発達年齢により変化していくのかを検討することを目的とした。2005年度生まれの0歳児をもつ親を第1回調査対象者(0歳児:282名)とし、2005年度生まれの子どもが、5歳児(第2回調査:625名)、小学2年生(第3回調査:273名)の時期に、同一の内容の質問紙調査を計3回にわたり1180名の親を対象に実施した。その結果、(1)親が考える絵本の読み聞かせの意義は、子どもの発達年齢にともなう変化はあまり認められない、(2)0歳児、5歳児、小学2年生の時期を通して、「感性が育つ」「親子の絆が深まる」「空想したり夢をもったりすることができる」という読み聞かせの過程で生じる側面に読み聞かせの意義を認めている親が多い、(3)0歳児、5歳児、小学2年生の時期を通して、「知性が育つ」「ことばの発達が早くなる」「文字が覚えらる」という読み聞かせの結果として生じる知的な側面に絵本の読み聞かせの意義を重視している親もいる、(4)読み聞かせをしている親自身が、読み聞かせをしている本人にとってもよい影響があるということを理解していない、といった点が明らかとなった。

キーワード

絵本の読み聞かせ, 考え, 親

Abstract

The purpose of this study was to focus on parents as readers of picture books: to study what types of thoughts parents have toward reading picture books, and how, if at all, the parents' thoughts change based on the child's developmental age. A survey with identical contents was administered thrice to 1,180 parents. The first survey participants were 282 parents with children born in 2005 aged 0; the second survey was administered to 625 parents with children aged 5 years, and the third survey was distributed to 273 parents with children born in 2005, but currently in grade 2. The research findings are as follows: 1) Not many differences regarding the parents' thoughts on the significance of reading picture books based on the child's developmental age were observed. 2) Many parents recognized the significance of reading and the developmental aspects facilitated through the reading process, such as "developing sensitivity," "strengthening the parent-child relationship," and "encouraging children to imagine or dream," which were applicable across all ages of 0, 5, and 2nd graders. 3) Some parents stressed the significance of reading picture books for the intellectual development facilitated by reading, such as "cultivating intelligence," "accelerating speech development," and "learning to read" across all ages of 0, 5, and 2nd graders. 4) The parents performing the readings were not aware of its positive effects on the readers themselves.

Key words

Reading picture books, thoughts, parents

問題と目的

絵本の読み聞かせは、子どもが生きていくために必須の活動ではないが、行動選択の自由が各家庭にゆだねられている社会的文化的な行動である(秋田・無藤, 1996)。文部科学省(2004)の調査によると、実際には9割近くの児童生徒が乳幼児の頃に母親から絵本の読み聞かせをしてもらった経験があり、多くの家庭で日常的に行われている活動であるといえる。日本における絵本をめぐる状況は、2000年の「子ども読書年」以来、大き

く変化した。たとえば、乳児健診で全ての赤ちゃんに絵本を手渡す「ブックスタート」運動¹⁾の広がりはめざましい。この運動は、赤ちゃんが親が絵本を介して向き合い、「あたたかくてたのしいことばのひとつときをもつ」ことを応援するものである。2014年8月31日現在、892の市区町村で実施されている(全国の市区町村数は1741)。この広がりは、全国で生まれてくる赤ちゃんの多くがブックスタートパックを受け取っていることになる。さらに絵本を受け取るだけでなく、実際には4か月の

* 1 : 聖徳大学大学院教職研究科・教授 / * 2 : 摂南大学法学部・教授

赤ちゃんの6割近くがすでに読み聞かせを体験しているという調査結果もある(横山・秋田, 2002; 藪中・吉田, 2010)。また、毎年国内で出版される新刊絵本の数は約2000冊にのぼり(川内, 2012)、あふれる絵本と早まる出会いということばで、現在の子どもと絵本の関係は表現できるであろう。

一方、絵本をめぐる心理学的研究においては、乳幼児期に着目して、絵本の読み聞かせ体験と言語発達の関連について、新しい概念の枠組みの創出について検討している(Fletcher & Resse, 2005)。また、乳幼児期に絵本を読み聞かせてもらうという経験は、子どもの自己形成や共感性、協調性を育てるなど、情緒や対人関係の発達に関係し(今井・坊井, 1994; 守屋, 1994; 植田・濱野, 2004)、その後の主体的な読書活動にもつながるといわれている。

このように、絵本は乳児期の早い時期から、子どもたちの生活の中に存在し、脚光を浴びている。そして、絵本の読み聞かせは、子どもが最初に経験する読書活動である。ここでの読書活動を充実させることにより、主体的な読書活動に繋がっていくのである。この主体的な読書活動は、子どもがことばを学び、感性を磨き、表現力を高め、想像力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身につけていく上で欠くことのできないものである(文部科学省, 2001)。このような児童期以降の読書推進のためにも乳幼児期からの絵本の読み聞かせの経験は大きな役割を担っているといえるだろう。

しかし、絵本の読み聞かせなどの読書の重要性は分かっているが、どのように読み聞かせや選書をしたらいいか分からないという親が多いことも事実である(松井・佐藤・上村, 2007)。親自身がすでに活字離れの世代なのである。情報を得るためのメディアは、本以外にもたくさんあり、情報収集の手段は読書に限らないのではないかという意見もある。このような状況の現代においても子どもの発達に及ぼす読書の意義は大きいであろう。特に乳幼児期において、読書は絵本が主体となるが、絵本のもつ教育的意味だけでなく、親子間の情緒的つながりの面でも大きいと考えられている。田代(2001)は、「子どもと楽しい時をすごそうと大人が読んであげたくなのが絵本です」と指摘している。また、絵本の本質について「絵本は大人に読んでもらうもの。耳から聞いた言葉と目を見た言葉の世界が子どもの中で1つになり、そこに絵本はできる」(松居, 2001)と述べている。

乳幼児期の家庭での絵本の読み聞かせは、親、特に母親が読み手である場合が多い。子どもの読書行動に及ぼす親の影響を検討した実証的研究としては次のようなものがある。乳児期の読み聞かせに対する親の意義の認識については、藪中・吉田(2010)が検討した。283名の乳児をもつ母親を対象に質問紙調査を実施した結果、乳児期の絵本の読み聞かせに対して、「知性・文字」「空想・絆」「聴く」「本好き」の4つの意義を認めてい

ること、重視する意義は個人差が認められること、意義の認識と読み聞かせ頻度とは関連が認められること、が示された。また、乳児の絵本との出会いについての実態やその効果については、ブックスタート事業のパイロット地区である杉並区での調査報告(秋田・横山・森田・菅井, 2002)や沖縄県での報告(友利・嘉数・若松, 2004)などがある。

幼児期の読書行動に及ぼす家庭環境の影響について、秋田・無藤(1996)は、幼児期の読み聞かせに対する母親の意義の認識を幼稚園の年長・年中・年少児をもつ母親293名を対象に検討している。その結果、読み聞かせの意義として「空想・ふれあい」という内生的意義を重視する者が多いが、「文字・知識習得」という読み聞かせの結果として生じる外生的意義を重視する者もいた。すなわち、読み聞かせに見出す意義は必ずしも皆同じではなく、個人差があることが明らかとされた。

それでは、子どもに絵本を読み聞かせる主体である親は、なぜ絵本の読み聞かせを行っているのだろうか。実のところ、絵本の読み聞かせに関する研究では、乳幼児からの絵本の読み聞かせの実態やその効果に関する研究は多くみられるが、読み聞かせ行動を選択する主体である親の意識に焦点を当てた研究は少ない。また、読み聞かせの主体である親が、読み聞かせ対象である子どもの年齢(発達段階)に即応した意識の変化を検討した研究はほとんど見当たらない。さらに、秋田・無藤(1996)の研究では、幼児期の発達年齢の違いによる親の意識の変化をとらえている。本調査では乳児期、幼児期(5歳児)、特に就学期、そして、入学後の小学2年生の読み聞かせに対する考えについての認識について、実証的検討を行うことにする。

以上、本研究では、絵本の読み手である親に焦点を当て、親は絵本の読み聞かせにどのような考えをもっているのか、また、どのような意義を見出しているのか、親の考えは、子どもの発達年齢により変化していくのかを検討することを本論文の具体的目的とする。

方法

1. 手続き

調査は、2005年度生まれの0歳児をもつ親を第1回調査対象者(0歳児)とした。2005年度に生まれた子どもが、5歳児(第2回調査)、小学2年生(第3回調査)の時期に、同一の内容の質問紙調査を計3回にわたり実施した。

調査時期は以下の通りである。第1回調査は2005年12月～2006年2月、第2回調査は2012年2月～3月、第3回調査は、2014年2月～3月に行った。

第1回(0歳児)調査は、関東地方の保健センターにおいてポリオ接種時に0歳児を第一子にもつ親に質問紙を724部配付し、郵送法により283部回収(回収率39.1%)した。

第2回(5歳児)調査は、関東地方にある10の幼稚園、関西

地方にある7つの幼稚園の5歳児学級に在籍する幼児の親を対象とした。配付数は、1017部で、637部回収(62.6%)した。

第3回(小学2年生)調査は、関東地方にある5つの小学校2年生に在籍する児童の親を対象とした。質問紙の配付数は475部で、274部回収(57.7%)した。

質問紙は無記名で、さらに回収の際に個人が特定されないように配慮した。具体的には、幼稚園、小学校を通じて回収を依頼した第2回と第3回調査では、同封した封筒に入れて封をして提出してもらった。

第2回調査で関東地方と関西地方の親の考えに大きな違いがある可能性を留意し、親の絵本の読み聞かせに対する考えの各項目について地方別にPearsonの相関係数を通して検討した。その結果、最低の項目でも0.90以上の相関が確認されたため、関東地方と関西地方の親のデータを合わせて分析対象とすることとした。

調査にあたっては、「子どもが小さいうちはのびのびと外で遊ぶ方がよい、知識よりも体験をというご家庭、小さい頃から本を読む楽しさを与えたい、文字に触れるのがよいというご家庭など、乳児期(幼児期・児童期)の読書に関してはいろいろな考えをもったご家庭があると思います。そこで、M市保健福祉課(幼稚園・小学校)の協力を得て、こうした考えと実態を調べるのが、本調査のねらいです」と説明を付した。回答頂く方は、対象の子どもを主として養育されている方に依頼した。また、この調査は強制でないこと、プライバシーが保障されていることを明記した依頼書も同封し、調査を依頼した。さらに、本調査は、第一著者が所属する研究機関の研究倫理委員会における承認を経て実施している。

2. 調査対象者

0歳児調査では、2005年度出生の4ヵ月から12ヵ月の0歳児(男児137名、女児146名)をもつ親283名(母親283名)、幼児期調査では、2005年度出生の5歳児(5歳児学級在籍の幼児:男児327名、女児310名)をもつ親637名(父親9名、母親628名、祖母1名)、児童期調査では、2005年度出生の小学2年生(男児129名、女児145名)をもつ親274名(父親23名、母親250名、祖母1名)の計1195名であった。本研究では、対象とする子どもを特に養育している者を親ととらえ、母親、祖母、父親のデータを含めて分析した。

本研究では、「絵本の読み聞かせをすることは、子どもにとってどのようなよいことがあると思いますか」という質問に対して無回答であった15名(0歳児:1名、5歳児:13名、小学2年生:1名)を除いた1180名(0歳児:282名、5歳児:625名、小学2年生:273名)を分析の対象とした。

3. 調査内容

家庭での読書環境についての質問、絵本との出会いに関する親の認識についての質問、親の読み聞かせに関する意義について

の質問、テレビ視聴についての質問、子育て環境と子育てに対する気持ちについての質問、フェイスシートから構成されている。

本研究では、このうち親の読み聞かせの意義について分析を行った14項目の具体的な内容は以下の通りである。

- 1: 感性が育つ
- 2: 親子の絆が深まる
- 3: 子どもが本を好きになる
- 4: 知性が育つ
- 5: 人の話が聞ける子になる
- 6: 子どもの頃の思い出になる
- 7: ことばの発達が早くなる
- 8: 親がゆったりした気分になる
- 9: 子どもが落ち着く
- 10: 親の子への愛情が深まる
- 11: 親が絵本を楽しめる
- 12: 子どもが親を好きになる
- 13: 空想したり夢をもったりすることができる
- 14: 文字を覚えられる

結果

「絵本の読み聞かせをすることは、子どもにとってどのようなよいことがあると思いますか」という質問に対する回答は、第1位から第3位までを選ぶかたちであったが、本研究では、順位は考慮せず、選択された3項目を同じように扱うこととした。なお、以下の統計処理は、SPSS12.0Jを用いて行った。

1. 子どもの発達と選択された絵本の読み聞かせの意義

各時期における読み聞かせの意義についての選択人数を表1に示した。各項目において χ^2 検定を行ったところ、項目3「子どもが本を好きになる」($\chi^2(2)=23.421, p<.01$)、項目5「人の話が聞ける子になる」($\chi^2(2)=14.170, p<.01$)、項目7「ことばの発達が早くなる」($\chi^2(2)=14.170, p<.01$)、項目13「空想したり夢をもったりすることができる」($\chi^2(2)=48.938, p<.01$)、項目14「文字を覚えられる」($\chi^2(2)=10.611, p<.01$)について、人数の偏りが有意であった。

残差分析を行ったところ、項目3「子どもが本を好きになる」では、0歳児で有意に少なく、5歳児で有意に多くなっている。項目5「人の話が聞ける」では、5歳児で有意に多く、小学2年生で有意に少なくなっている($p<.05$)。項目7「ことばの発達が早くなる」では、5歳児で有意に少なく、小学2年生で有意に多い($p<.05$)。項目13「空想したり夢をもったりすることができる」では、0歳児・小学2年生で有意に多く、5歳児で有意に少ない($p<.05$)。項目14「文字を覚えられる」では、0歳児で有意に少なく、5歳児で有意に多かった($p<.05$)。

また、各項目を選択した人数によって順位づけしたものを表2に示した。各年齢時期とも、項目1「感性が育つ」が最も多く、

表1 各時期における読み聞かせの意義についての選択人数

項目	0歳児		5歳児		小学2年生	
	人	%	人	%	人	%
1 感性が育つ	212	75.2	470	75.2	189	69.2
2 親子の絆が深まる	114	40.4	279	44.6	110	40.3
3 子どもが本を好きになる	** 117	41.5	365	58.4	135	49.5
4 知性が育つ	66	23.4	126	20.2	72	26.4
5 人の話が聞ける子になる	** 45	16.0	142	22.7	35	12.8
6 子どもの頃の思い出になる	27	9.6	55	8.8	24	8.8
7 ことばの発達が早くなる	** 31	11.0	33	5.3	38	13.9
8 親がゆったりした気分になる	10	3.5	20	3.2	14	5.1
9 子どもが落ち着く	22	7.8	44	7.0	24	8.8
10 親の子への愛情が深まる	7	2.5	20	3.2	13	4.8
11 親が絵本を楽しめる	7	2.5	15	2.4	2	0.7
12 子どもが親を好きになる	6	2.1	4	0.6	2	0.7
13 空想したり夢をもったりすることができる	** 161	57.1	209	33.4	131	48.0
14 文字を覚えられる	** 20	7.1	91	14.6	30	11.0

**p<.001

表2 各時期における選択人数による項目の順位

順位	0歳児	5歳児	小学2年生
1	項目1	項目1	項目1
2	項目13	項目3	項目3
3	項目3	項目2	項目13
4	項目2	項目13	項目2
5	項目4	項目5	項目4
6	項目5	項目4	項目7
7	項目7	項目14	項目5
8	項目6	項目6	項目14
9	項目14	項目9	項目6
10	項目9	項目7	項目9
11	項目8	項目8	項目8
12	項目10	項目10	項目10
13	項目11	項目11	項目11
14	項目12	項目12	項目12

注：

項目 No.	項目
1	感性が育つ
2	親子の絆が深まる
3	子どもが本を好きになる
4	知性が育つ
5	人の話が聞ける子になる
6	子どもの頃の思い出になる
7	ことばの発達が早くなる
8	親がゆったりした気分になる
9	子どもが落ち着く
10	親の子への愛情が深まる
11	親が絵本を楽しめる
12	子どもが親を好きになる
13	空想したり夢をもったりすることができる
14	文字を覚えられる

0歳児、5歳児では約3/4、小学2年生でも約7割の親が選んでいた。また、時期によって多少順位や選んだ人数に変動はあるものの、項目2「親子の絆が深まる」、項目3「子どもが本を好きになる」、項目13「空想したり夢をもったりすることができる」も多く選ばれていた。一方で、選ぶ人が少ない項目も各時期で共通しており、項目8「親がゆったりした気分になる」、項目10

「親の子への愛情が深まる」、項目11「親が絵本を楽しめる」、項目12「子どもが親を好きになる」を選んだ親は5%以下であった。

2. 子どもの発達と絵本の読み聞かせの意義の分類

各時期において、親が選択した読み聞かせの意義を数量化Ⅲ類によって分析し、得られた13個の解のうち、相関係数が0.6以上のものを取り出したところ、各時期とも第2解までとなり、第1解を第1軸、第2解を第2軸とした。各軸のカテゴリースコアを表3～5に、第1解を横軸に、第2解を縦軸にとった各項目の布置図を図1～3に示した。

各軸の正負によって分類すると次のようになる。0歳児（表3）では、①[項目7・10・14]：ことばの発達が早くなる、親の子への愛情が深まる、文字を覚えられる、②[項目5・8・11]：人の話が聞ける子になる、親がゆったりした気分になる、親が絵本を楽しめる、③[項目2・6・12]：親子の絆が深まる、子どもの頃の思い出になる、子どもが親を好きになる、④[項目1・4・9・13]：感性が育つ、知性が育つ、子どもが落ち着く、空想したり夢をもったりすることができる、であった。

5歳児（表4）では、①[項目3・6・8・11・12]：子どもが本を好きになる、子どもの頃の思い出になる、親がゆったりした気分になる、親が絵本を楽しめる、子どもが親を好きになる、②[項目1・4・7]：感性が育つ、知性が育つ、ことばの発達が早くなる、③[項目5・13・14]：人の話が聞ける子になる、空想したり夢をもったりすることができる、文字を覚えられる、④[2・9・10]：親子の絆が深まる、子どもが落ち着く、親の子への愛情が深まる、であった。

小学2年生（表5）では、①[項目6・9・12・13]：子どもの頃の思い出になる、子どもが落ち着く、子どもが親を好きになる、空想したり夢をもったりすることができる、②[項目3・7・11・14]：子どもが本を好きになる、ことばの発達が早くなる、親が絵本を楽しめる、文字を覚えられる、③[項目1・4・5]：感性が育つ、知性が育つ、人の話が聞ける子になる、④

表3 数量化Ⅲ類による2つの軸とその値(0歳児)

(a) 第1軸			(b) 第2軸		
項目14	文字を覚えられる	1.57226	項目11	親が絵本を楽しめる	4.37357
項目4	知性が育つ	0.80314	項目14	文字を覚えられる	3.79141
項目7	ことばの発達が早くなる	0.78885	項目7	ことばの発達が早くなる	2.22571
項目3	子どもが本を好きになる	0.59791	項目10	親の子への愛情が深まる	1.73742
項目10	親の子への愛情が深まる	0.57668	項目8	親がゆったりした気分になる	1.12328
項目13	空想したり夢をもったりすることができる	0.37104	項目5	人の話が聞ける子になる	0.82122
項目9	子どもが落ち着く	0.25400	項目4	知性が育つ	-0.14083
項目1	感性が育つ	0.08274	項目3	子どもが本を好きになる	-0.15680
項目6	子どもの頃の思い出になる	-0.14778	項目2	親子の絆が深まる	-0.17353
項目2	親子の絆が深まる	-0.84294	項目1	感性が育つ	-0.20958
項目5	人の話が聞ける子になる	-1.37401	項目13	空想したり夢をもったりすることができる	-0.38680
項目11	親が絵本を楽しめる	-2.81635	項目9	子どもが落ち着く	-0.48695
項目8	親がゆったりした気分になる	-5.23338	項目12	子どもが親を好きになる	-1.16122
項目12	子どもが親を好きになる	-5.30016	項目6	子どもの頃の思い出になる	-2.36970

表4 数量化Ⅲ類による2つの軸とその値(5歳児)

(a) 第1軸			(b) 第2軸		
項目8	親がゆったりした気分になる	4.33855	項目12	子どもが親を好きになる	5.38008
項目12	子どもが親を好きになる	3.90407	項目11	親が絵本を楽しめる	3.87933
項目6	子どもの頃の思い出になる	3.34668	項目7	ことばの発達が早くなる	2.77930
項目11	親が絵本を楽しめる	3.21254	項目4	知性が育つ	1.39578
項目10	親の子への愛情が深まる	2.48227	項目6	子どもの頃の思い出になる	0.92912
項目2	親子の絆が深まる	0.34702	項目8	親がゆったりした気分になる	0.88016
項目9	子どもが落ち着く	0.27178	項目1	感性が育つ	0.18440
項目3	子どもが本を好きになる	0.00971	項目3	子どもが本を好きになる	0.12773
項目1	感性が育つ	-0.16836	項目14	文字を覚えられる	-0.25571
項目13	空想したり夢をもったりすることができる	-0.19349	項目2	親子の絆が深まる	-0.26764
項目5	人の話が聞ける子になる	-0.40880	項目13	空想したり夢をもったりすることができる	-0.51403
項目4	知性が育つ	-0.91169	項目5	人の話が聞ける子になる	-0.87176
項目14	文字を覚えられる	-1.41021	項目10	親の子への愛情が深まる	-3.43142
項目7	ことばの発達が早くなる	-2.29663	項目9	子どもが落ち着く	-3.44311

表5 数量化Ⅲ類による2つの軸とその値(小学2年生)

(a) 第1軸			(b) 第2軸		
項目12	子どもが親を好きになる	6.12911	項目12	子どもが親を好きになる	9.95564
項目6	子どもの頃の思い出になる	2.95923	項目11	親が絵本を楽しめる	6.86536
項目8	親がゆったりした気分になる	2.16322	項目6	子どもの頃の思い出になる	1.84543
項目9	子どもが落ち着く	1.86484	項目14	文字を覚えられる	1.31396
項目10	親の子への愛情が深まる	1.66480	項目7	ことばの発達が早くなる	1.22844
項目2	親子の絆が深まる	0.64564	項目9	子どもが落ち着く	0.23081
項目13	空想したり夢をもったりすることができる	0.02429	項目3	子どもが本を好きになる	0.07972
項目1	感性が育つ	-0.10813	項目13	空想したり夢をもったりすることができる	0.01167
項目3	子どもが本を好きになる	-0.11674	項目1	感性が育つ	-0.03065
項目4	知性が育つ	-0.93296	項目2	親子の絆が深まる	-0.11703
項目5	人の話が聞ける子になる	-1.00895	項目4	知性が育つ	-0.57673
項目14	文字を覚えられる	-1.35209	項目5	人の話が聞ける子になる	-1.16437
項目7	ことばの発達が早くなる	-1.79005	項目8	親がゆったりした気分になる	-2.21303
項目11	親が絵本を楽しめる	-3.45010	項目10	親の子への愛情が深まる	-3.84134

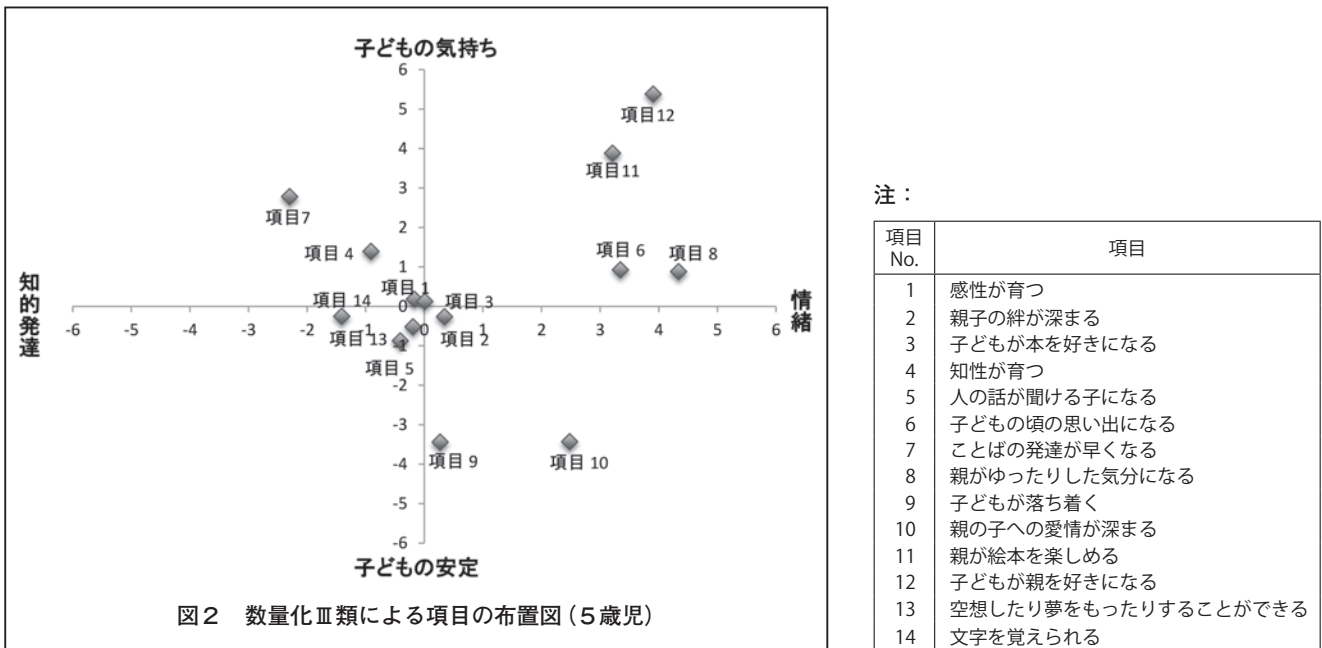
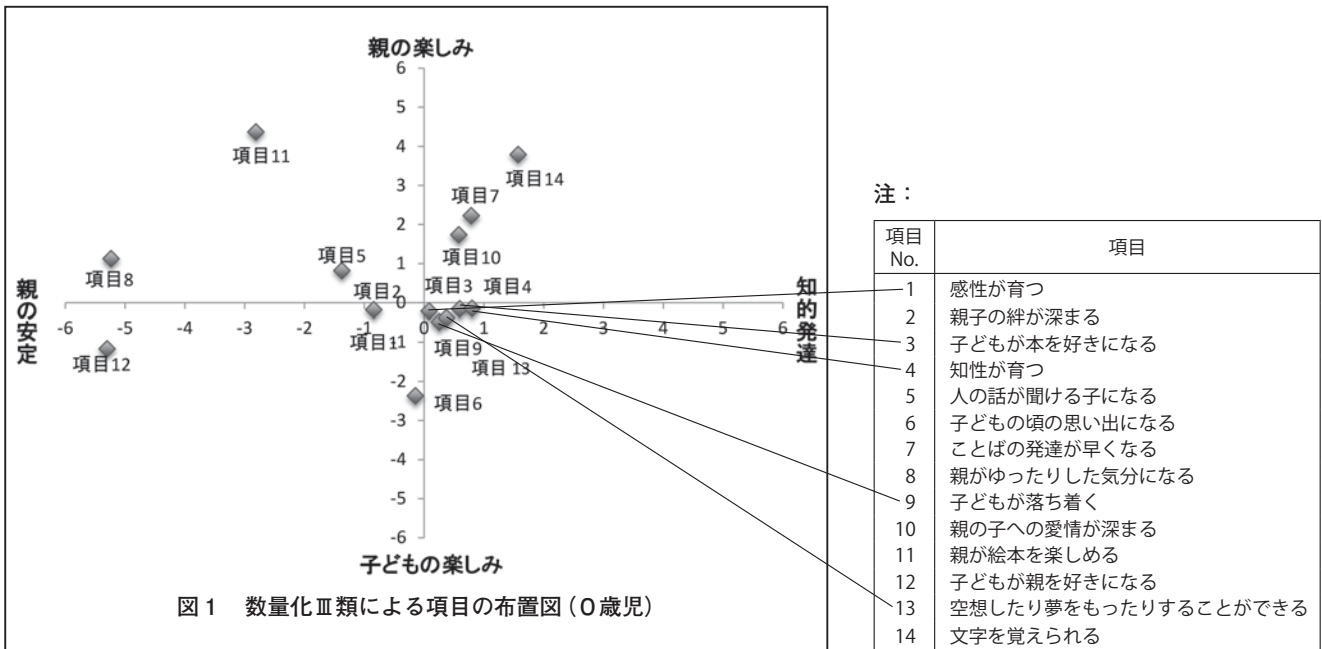
[項目2・8・10]: 親子の絆が深まる, 親がゆったりした気分になる, 親の子への愛情が深まる, であった。

各軸の値をみると, 0歳児(図1)では, 第1軸は, 正の方向に大きいのが項目14(文字を覚えられる)・4(知性が育つ)・7(ことばの発達が早くなる), 負の方向に大きいのが項目12(子どもが親を好きになる)・8(親がゆったりした気分になる)・11(親が絵本を楽しめる)であり, 「知的発達⇔親の安定」と名付けられる。第2軸は, 正の方向に大きいのが項目11(親が絵本を楽しめる)・14(文字を覚えられる)・7(ことばの発達が早くなる), 負の方向に大きいのが項目6(子どもの頃の思い出になる)・12(子どもが親を好きになる)・9(子どもが落ち着く)であり, 「親の楽しみ⇔子どもの楽しみ」と名付けられる。

5歳児(図2)では, 第1軸は, 正の方向に大きいのが項目8(親がゆったりした気分になる)・12(子どもが親を好きになる)・6(子どもの頃の思い出になる), 負の方向に大きいのが

項目7(ことばの発達が早くなる)・14(文字を覚えられる)・4(知性が育つ)であり, 「情緒⇔知的発達」と, 第2軸は, 正の方向に大きいのが, 項目12(子どもが親を好きになる)・11(親が絵本を楽しめる)・7(ことばの発達が早くなる), 負の方向に大きいのが, 項目9(子どもが落ち着く)・10(親の子への愛情が深まる)・5(人の話が聞ける子になる)であり, 「子どもの気持ち⇔子どもの安定」と名付けられる。

小学2年生(図3)では, 第1軸は, 正の方向に大きいのが項目12(子どもが親を好きになる)・6(子どもの頃の思い出になる)・8(親がゆったりした気分になる), 負の方向に大きいのが項目11(親が絵本を楽しめる)・14(文字を覚えられる)・7(ことばの発達が早くなる)であり, 「子どもの楽しみ⇔親の楽しみ」と, 第2軸は, 正の方向に大きいのが項目12(子どもが親を好きになる)・11(親が絵本を楽しめる)・6(子どもの頃の思い出になる), 負の方向に大きいのが項目10(親の子への愛



情が深まる)・8(親がゆったりした気分になる)・5(人の話が聞ける子になる)であり、「子どもの気持ち⇔親の気持ち」と、それぞれ名付けることができる。

考察

1. 子どもの発達と選択された絵本の読み聞かせの意義

藪中・吉田(2010)は、Kruglanski(1975)の「内生的帰属—外生的帰属」という帰属の分類概念を用いて、乳児期の読み聞かせに対する母親の意義を、読み聞かせの過程で生じることを重視する内生的意義と、結果としての所産や効用、その結果が他の目標の手段として働くことを重視する外生的意義の2種類

に分けてとらえている。本研究においてもその分類を適用して考えることとする。

2005年度出生の子どもが0歳児、5歳児、小学2年生の時期に、その親の読み聞かせに対する意義の認識を検討し、次のことが明らかとなった。

第一に、子どもの年齢が上がっても、親が考える絵本の読み聞かせの意義は、大きく変化はしないということである。各年齢時期で多く選ばれた「感性が育つ」、「子どもが本を好きになる」、「親子の絆が深まる」「空想したり夢をもったりすることができる」に共通しているのは、子どもの情緒面への配慮である。多くの親は、「感性や空想・親子の絆」という読み聞かせ

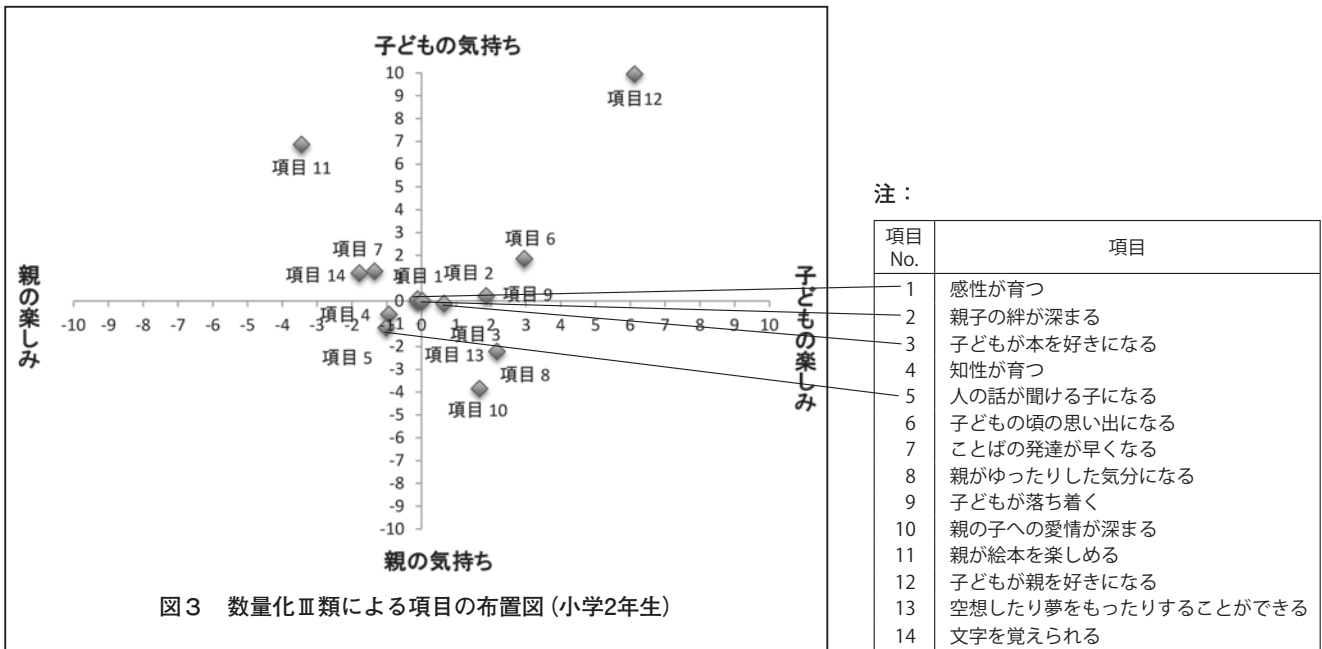


図3 数量化Ⅲ類による項目の布置図(小学2年生)

の過程で生じる内生的意義を重視していると考えられる。一般に、読書の目的の1つとして知的効用があげられることが多い。本調査においても、「知性が育つ」、「ことばの発達が早くなる」、「文字を覚えられる」という読み聞かせの結果として生じる知的な外生的意義を重視している親がいることが示された。すなわち、読み聞かせに見出す意義は必ずしも皆同じではないことが明らかとなった。しかしながら、幼い子どもに対する絵本の読み聞かせについては、絵本の内容を単に子どもに伝えることにより、ことばや文字、お話の知識を与えて育てるということよりも、多くの親は読み聞かせの過程で生じる内生的な意義である「感性や空想・親子の絆」をより重視しているといえる。これは、「絵本を読み聞かせる」ということが、親と子がともに絵本に向き合い、絵本を介して対話し、「感性や空想・親子の絆」という読み聞かせの過程自体がもっている経験や感想を共有する場であるということを示している。この結果は、一見すると当たり前のようであるが、乳児期から小学2年生までの親がもつ考えを明らかにした点で重要な指摘であると考えられる。

第二に、絵本の読み聞かせが親自身に影響を及ぼすものであることとはとらえられていないということである。各時期を通して、選んだ人が少ない「親がゆったりした気分になる」、「親の子への愛情が深まる」、「親が絵本を楽しめる」、「子どもが親を好きになる」に共通しているのは、間接的にはあれ子どもに影響を与えるものではあるが、親が主体であることとはとらえていないことである。すなわち、絵本の読み聞かせの意義を問われたときに親がまず考えるのは、子どもへの直接的な影響である。読み聞かせでは、聞き手である子どもだけでなく、読み手である大人にも影響を与える、相互作用をもったコミュ

ニケーションであることは明らかとなっている(藪中・吉田, 2014)。しかし、読み聞かせをしている親自身が、読み聞かせをしている本人にとってもよい影響があるということを理解していないための結果であるといえよう。

第三に、全体の傾向としては、子どもの年齢による大きな違いはないが、時期によって選ぶ人数が異なる項目があることが示唆された。5歳児に多く0歳児に少ないのは、「子どもが本が好きになる」、「文字を覚えられる」であった。これらは、子どもが幼い時にはあまり重視されないが、就学を控えた時期に関心をもつものであろう。5歳児と小学2年生で違いがあるのは、「人の話が聞ける子になる」と「ことばの発達が早くなる」であった。「人の話が聞ける子になる」は5歳児に多く、小学2年生で少ないが、これもやはり就学期の子どもにとって重要とみなされているものであろう。逆に、5歳児に少なく小学2年生で多いのが「ことばの発達が早くなる」であるが、これについては、「ことば」の意味が就学前後で異なっているのではないだろうか。すなわち、就学前は「おしゃべり」を代表とする話し言葉を中心とした「ことば」であり、これは、年長児ともなればほぼ完成している。就学後は教室での言葉遣いや読み書きなど、幼児期とは異なった言葉の使い方が求められる。「ことばの発達が早くなる」の結果は、このことを反映したものと考えられよう。「空想したり夢をもったりすることができる」は、0歳児、小学2年生で多く、5歳児で少なかった。子どもが幼いときには「空想・夢」が大事だと考えられているが、就学前には、より「現実的」なことに関心が移り、小学生になればまた、「空想・夢」が重視されるということであろうか。

2. 子どもの発達と絵本の読み聞かせの意義の分類

数量化Ⅲ類によって絵本の読み聞かせの意義を分類した結果

からは、子どもの発達によって同じグループになる項目が異なることがわかった。どの時期においても同じグループに属しているのは「感性・知性が育つ」、「子どもの頃の思い出・子どもが親を好きになる」である。どの時期においても、それぞれ一方を重視している人は他方も重視していることになる。「感性が育つ」については、70～75%の人が、「知性が育つ」で20～25%の人が選んでおり、「感性」と「知性」とがバランスよく育つことを、子どもの年齢にかかわらず、親は望んでいるとみることができよう。「子どもの頃の思い出になる」については、1 割弱、「子どもが親を好きになる」ではさらに少数の人しか選んでいない。これらを選んだ親は、絵本を読み聞かせの結果として生じる外生的意義を重視し、絵本を読み聞かせることからの直接的な影響ではなく、間接的な影響を重視していると考えられる。これは、親の考える絵本の読み聞かせの意義が多様であることを示すものといえよう。その他の多くの項目は、時期によって異なるグループに分かれているが、これは、時期によって、絵本の読み聞かせの意義を複数選ぶときの組み合わせ方が変わっていることを示している。

分類の軸についても、時期によって変化している。各軸の値から、0 歳児では、第 1 軸は「知的発達⇔親の安定」、第 2 軸は「親の楽しみ⇔子どもの楽しみ」、5 歳児では、第 1 軸は「情緒⇔知的発達」、第 2 軸は「子どもの気持ち⇔子どもの安定」、小学 2 年生では、第 1 軸は「子どもの楽しみ⇔親の楽しみ」、第 2 軸は「子どもの気持ち⇔親の気持ち」と名付けたが、各時期を通して同じ軸はない。親が考える絵本の読み聞かせの意義は、子どもの発達段階によって変わっていくことが、このことから示されたといえよう。

本研究の課題と今後の展望

本研究では、養育者を対象として調査を行ったが、実際の回答者は母親がほとんどであった。実際に子どもに読み聞かせを行っているのは、母親だけではないことは本研究からも明らかである。絵本・子育て・読み聞かせを応援しているコミュニティサイト「mite (ミーテ)」が公表したアンケート調査結果⁽²⁾によると、母親以外にも読み聞かせをする家庭は全体の80%のほり、そのうち48%の父親が読み聞かせを行っている。また、父親の読み聞かせの実態については、伊東・谷出 (2010)、駒井 (2011) などが調査し、父親の読み聞かせの実態を明らかにしている。現代の子どもが経験している読み聞かせの実態により近づけるためには、父親をはじめ他の養育者の読み聞かせに対する意義も明らかにしていく必要があるだろう。

また、本研究では親の読み聞かせの意識に焦点を当てており、実際にどのように読み聞かせが行われているか、については明らかにされていない。実際の読み聞かせ行動と読み聞かせに対する意義を縦断的研究で追跡することで、読み聞かせの意義や

効果をより明確に示すことができると考えている。

文献

- 秋田喜代美・無藤隆 (1996). 幼児への読み聞かせに対する母親の考えと読書環境に関する行動の検討 教育心理学研究, 44, 109-120.
- 秋田喜代美・横山真貴子・森田祥子・菅井洋子 (2002). ブックスタートパイロットスタディ 4ヵ月児調査結果概要 第1回ブックスタート全国大会報告書, p.4-15.
- 川内五十子 (2012). 「新しい絵本を知る・楽しむ・考える」-200年代に出版された子どもの絵本から- (子どもの読書活動の実態とその影響・効果に関する調査研究報告書), 独立行政法人 国立青少年教育機構.
- 伊東知之・谷出千代子 (2010). 父親の育児参加への支援体制づくりに関する試論-集客型と出前型への参加者の実態から-, 仁愛大学研究紀要 人間生活楽部篇第2号, 211-130.
- 駒井美智子 (2011). 保育園児の保護者を対象にした家庭内における絵本の利用状況に関する調査, 東京福祉大学・大学院紀要第2巻第1号, 23-29.
- 松井剛太・佐藤智恵・上村真生 (2007). 保育者の考える「読解力」に関する研究-読み聞かせにおける絵本の選択理由から-, 広島大学大学院教育学研究科紀要, 3-56, 325-332.
- 松居直 (2001). いのちと共鳴する絵本, 河合隼雄・松居直・柳田邦絵本の力, (p.83-116), 岩波書店.
- 文部科学省 (2004). 親と子の読書活動等に関する調査 報告書, 財団法人日本経済研究所.
- 守屋慶子 (1994). 子どもとファンタジー-絵本による子どもの自己の発見, 新曜社.
- 田代康子 (2001). もっかい読んで ひとなる書房.
- 友利久子・嘉数朝子・若松昭子 (2004). 親子間のコミュニケーションスタイルについての考察 I -沖縄県のブックスタートの取り組みを通して-, 琉球大学教育学部生涯教育実践センター紀要, 6, pp.99-109.
- 植田佳菜・濱野恵一 (2004). 読み聞かせの経験及び読書量が子どもの性格特性に及ぼす影響. 児童臨床研究所年報 (ノートルダム清心女子大学児童臨床研究所), 17, 50-57.
- 藪中征代・吉田佐治子 (2010). 乳児をもつ養育者の絵本に関する考えと環境についての考察. 聖徳大学研究紀要, 20, 41-48.
- 藪中征代・吉田佐治子 (2014). 絵本をめぐる親子の言語的相互作用-絵本読み場面における子どもの語りを通して-, 聖徳大学研究紀要, 24, 1-9.
- Fletcher, K.L. & Resse, E. (2005) Picture book reading with young children: A conceptual framework. *Developmental Review*, 25, 64-103.

注

- (1) ブックスタートは、1992年イギリスで最も多民族の人たちが住むパーミンガム市において、読み書き能力の育成という就学準備教育の目的で始まった運動である。日本には、2000年の「子ども読書年」に「子ども読書推進会議」によって紹介され、2001年4月に本格的に実施された。導入の際、日本ではイギリスとは異なり、子育て支援の活動として行うことが確認され、「赤ちゃんに絵本を通して楽しいひとときを共有すること (Share book with your baby)」が理念として掲げられている。
- (2) 「ことばで育む親子のきずなづくり」をテーマに、2006年から運営されている。絵本作家インタビュー、絵本やキャンペーン情報など、読み聞かせをサポートするコンテンツ情報を提供している (<http://mite.kumon.ne.jp/>)。

付記

研究にご協力いただきました保護者の皆様と幼稚園・小学校の先生方に心より御礼申し上げます。

本研究は、科学研究費補助金基盤研究 (c) (課題番号 23500890: 研究代表者: 藪中征代) の補助を受けて行われた。